



Title	中井履軒作、象鈕の印より出発して
Author(s)	大庭, 脩
Citation	懷徳. 1988, 57, p. 22-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90695
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中井履軒作、象鈕の印より出発して

大庭 脩

一 享保来航の象

懷徳堂のコレクションに最近納められた中井履軒が作った象の鈕の陶印を見て、疑問が浮かんた。それは、履軒は象を見たことがあったのかというものである。

かねてから、江戸時代の象には関心があったので、この疑問に触発されて、今の段階でわかっていることを書き、識者の更なる教示を仰ぎたいと思う。

履軒の作ったという象の陶印は四顆で、他にも木印が一顆あり(口絵図版一)、まことに愛くるしく、象の真の姿をよく写していると思うので、果して実物を見たのかしらと首をかしげたのである。そういうことを考えるようになった理由というか、或いは本稿の要を得た結論というか、いずれともいえる文章が、竹山・履軒の師五井

蘭洲の『茗話』の中にあるので、まずそれを引用する。

日本人のかける虎の画は、もろこしのを見てうつすならん、いづれもたけきさまなり。享保の初年に、南蛮より象を貢しけり。諸人あまねく真象を見て、これ迄の象の図のよからぬをしる。虎の行は如病、鷹の立は如眠とあれば、虎もたけくかくは誤ならん。

享保の初年に真象が来たのを見て、それまでの象の図が本物とは違うことを知ったというのである。享保の初年に象が来たという話は、日中動物交流史上、昭和のバングラに匹敵する有名な話で、私も日中交流の秘話として紹介したことがあるが、⁽¹⁾中学校で社会科学を教えている卒業生によると教科書の教師用参考書の封建社会の解体のところ⁽²⁾に、お話のタネとして詳しく紹介されているそうだから、中学生の中には聞き知った子が居るかも知れ

ぬ。そこで簡単に要項をしるす。

享保十一年（一七二六）十二月、將軍徳川吉宗は長崎に來航している中国船の商人に象をつれて來るように命じ、午三十八番東京船船頭吳子明が引き受けて翌年四月二十九日に帰帆した。東京（トンキン）船はベトナムのハノイから來た船である。そして明けて享保十三年六月十三日、ベトナムのハイフオ附近、當時の広南出港の船が、おす・めす二頭の象を積んで長崎に入港した。船頭は鄭大威、この年、申歳の第十九番目の船なので申十九番広南船とよばれた。ところが九月十一日、雌象は舌にはれものができて死んでしまい、一匹残った七歳の雄象は享保十四年三月十三日に長崎を出発し、二十二日に下関、四月十八日兵庫、十九日尼崎、二十日大坂を経て二十五日伏見につき、二十六日京都に入る。四月二十八日に御所にひいて靈元天皇・中御門上皇にお見せし、更に東下して五月二十五日に江戸到着、浜御殿に入れ、二十七日、吉宗は大広間車よせに出て桜田門からひいてきた象を見た。享保十五年六月晦日、御用濟ということで中野村源助ほか二名に預けられ、寛保二年十二月十一日、中野村で病死した。第二次大戦中まで中野に象の骨を埋んだ塚があったという。

この時長崎から江戸までの長距離を七十余日にわたって旅行し、江戸では十二年ばかり生存していたのであるから、多くの日本人が活きた象を目にする機会があった。蘭洲の『茗話』にいう象はこの象である。

五井蘭洲は享保十二年、懷徳書院の助教から江戸に遊び、十六年に津輕侯の辟に應じて元文四年に大坂に帰るまで津輕藩儒であったというから、彼が享保の象を見たのは大坂を通過した時ではなく、江戸においてである。

江戸時代及びそれ以前において、象が日本に渡來したことは極めて稀である。高島春雄氏の『動物渡來物語』によると、日本に生きた象が來たのは、慶永十五年（一四〇八）に若狭へ、また同年六月二十二日に若狭へ着いた南蛮船から、時の將軍足利義持へ黒象一匹が寄進された。この黒象は義持が朝鮮國へ大藏經を求めた時に朝鮮へ贈られ、これが朝鮮への象の初渡であるという。次に天正二年（一五七四）七月に明船が博多へ象と虎を、翌年同じく明船が豊後の白杵に來て象を虎、孔雀と共に大友義鎮に贈り、そして慶長二年（一六〇二）には交趾から虎・孔雀とともに象一匹が徳川家康に贈られた。それで享保の象は第六回目の渡來に當るといふ。第七回目は文化十年（一八一三）六月二十八日にオランダ船が積ん

で来て將軍へ献上したい旨申し入れたが、老中評議の末時節柄無用と謝絶⁽⁴⁾、第八回目は文久三年（一八六三）四月にアメリカ商船シタン号が横浜に齎らし、江戸西両国で見世物にし、翌々年には大坂でも見せた。決してしばしば渡来したといえるようなものではなく、従つて享保の象の渡来は甚だ重要な、そして珍らしい事件であつたのである。

二 新題和歌百首と百首詩

五井蘭洲の新題和歌百首の中に象の歌がある。⁽⁵⁾

象

もろこしにおひぬものから海山をこえてき

さてふ文字も作りし

象ハ南方交趾占城等の産物也象の文字は即象の形を

其まゝ文字にかたとりたりといふ

「海山をこえてきさ」という句に、享保に來た象を意識していることが察しられる。

この蘭洲の新題和歌百首に対し、川井桂山、加藤竹里がそれぞれ和している。桂山は

金門□は過ぬることにおろかみて

いやあるきさのいやをしぞ思ふ

竹里は

咲く花の長き日あかぬなかめより

山ハきさてふ名にや立けん

とある。これに対し、中井竹山は和歌新題百首詩を作り、和した。その序に

蘭洲先生嘗自撰倭歌新題一百賦之。川井子和加藤子常及先人續和焉。先生命積善作詩以附之。未及卒業「會先人寢疾侍養周年經至易簣」。既應命卒業但以題爲和歌設也。係詩家熟題者。居十之一二。乃欲別賦和歌題爲乎詩者二十首實諸卷尾。而未遑云。

宝曆丁丑之冬積善識

とし、宝曆七年の年記がある。そして竹山の象の詩は、長鼻高形獸、航來享保年、當時我生晚、但見画图傳とあり、生まれるのが遅くて享保の年には間にあわず、画图でしか見たことはありませんという、何だか言訳に終始しているような詩である。ただこの写本は懷徳堂文庫・小天地閣叢書のものであるが、序文中「」に囲んだ部分は異筆で、時を違えて竹山が書き入れたもので最初の稿本らしく見え、同文庫の「新田文庫」の印のある写本は、序文が

蘭洲先生嘗自撰倭歌新題一百賦之、川井子和加藤子常

及先人續和焉。先生令善作詩以附之。善受卷賞諸几間時得一二隨投籠中、以其屬餘事不甚專意。中丁家娘、廢棄有歲、頃日餘暇偶舊稿、既獲數十首、乃急探枯腸、竟以卒編、但以題為和歌設也涉詩家熟題者概十數首、乃欲別賦和歌題險乎詩者二十篇附之卷尾以貽好事者未遑云 辛巳九月積善識

とあって、辛巳はおそらく宝暦十一年であろう。こちらの方の象の詩は、

曾聽充蠻貢、航來享保年、高形與長鼻、徒作太平愆とし、更に白香山象詩、長鼻高形出獸倫という双行の注を加えている。白楽天の象の詩も見つけ、自分の詩も推敲して面目を一新して精進のあとを示しているのである。しかし私には、詩の良し悪しよりも、自分は享保の象を見ていないという竹山の語りの方が大切である。享保十五年に竹山は生まれ、履軒は十七年に生まれた。象が道中をした十四年には、彼等は生まれてはいなかったのである。

では文化十年に來た象の場合はどうだろう。文化十年は一八一三年、竹山は文化四年、一八〇四年に死に、履軒は文化十四年、一八一七年に八十六歳で死んでいる。文化の象は長崎へ來ただけで終ったので、大坂の人が見

中井履軒作、象鈕の印より出発して



図1 文化の象版画 神戸市博物館蔵

る機会はなかったが、とにかく履軒の方は存命であった。

たとえば真の象を見ることがなくとも、文化の象の姿は版画によって伝えられ、見知ることができたのである。神戸市立博物館に所蔵する「阿蘭陀船持渡牝象」の版画は、同館の絵葉書にもなり、最も有名なものである(図1)。左側を頭にして象の横側の姿が画かれ、黒人の象使いが敷物を敷いてまたがり、上部に

文化十四年六月廿八日入津、阿蘭陀船持渡牝象乙匹、量目凡千七百斤、高サ七尺頭ヨリ尾マテ、長サ七尺五



図2 文化の象版画 大庭崙藏

寸、前足三尺五寸、後足三尺、足廻り三尺、鼻長サ五尺余、尾長サ五尺、歳五ツ、出所セイロン、飼方、米六升余、茅三荷余、甘蔗百本、蜀黍、糖一斤余、水、若病アルハ酒一升五合ニ水ヲ加ヘ朝夕ニ用ナリと説明を書く。

家蔵の版画も同巧であるが、横長にとり、象の頭は右側にあり、黒人の象使がやはり敷物を敷いてまたがっているが、服装は違う(図2)。説明は右側にあつて、

文化十年西六月廿七日入津ヲランダ船ヨリ連渡象 歳五歳 高サ六尺五寸 頭ヨリ尾際迄七尺 前足三尺 後足二尺五寸 足廻り二尺五寸 鼻長サ三尺五寸 尾長サ四尺五寸 爪二寸計生 出所ベンガラ

と書き、寸法は概して小ぶりになっている。ただ象の体つきも表情もよく似ていて、同一の実物を写したと考えられる。

三 享保の象に関する文献

享保の象に関しては多くの文献が残っている。

その大体の経過を要領よくまとめたものは、『通航一覽』巻一七五・一七六、安南国部五・六の「御所望象始末」で、一七五が長崎到着と長崎滞留時、一七六は長崎

から江戸迄の道中と江戸到着後の始末である。その中で長崎から江戸までの道中の途次に村々で送迎をした記録が村方文書に残っているが、『承寛雜錄』に「象志、馴象集等出来のよしなり」という象に関する書物が出版された。奥田士亨（三角）の馴象記によれば、

既、而都下坊市或図其狀、或塑其像、壳鬻、伝玩不可、勝、紀、有、因、致、富者、

と記している。その奥田三角の馴象記の収められている『詠象詩』という書物自体がきわものの一つで、余り他人を批難するわけにはゆかないのである。

『詠象詩』は全十五丁、享保己酉新刊、京兆、書肆二西齋藏版とあり、まさしく象の道中のあった年、今出川大納言公詮の「關庭觀馴象」と題する七言律を筆頭に高辻中納言総長以下六人の公卿、伊藤長胤東涯以下十一人の詩があり、奥田三角の「馴象記」があつて七丁目を終える。八丁以下は補遺とし、随得便録として江村若虚宗実以下二十二人の詩文を八丁にわたつて載せている。従つて、三角の「享保己酉夏五月書於京師古義書院」で結ばれた馴象記で終る七丁本が、象の京都通過後すぐに刊行されたのであろう。

同じく享保十四己酉歳五月吉とし、白梅園の述、書肆

は押小路通富小路角、安田万助が出版の『靈象貢珍記』という書がある。全六丁、柱の下部に二西齋の文字の陰刻がある点、書型が縦二二・八センチ、横一六・一センチ、小菊の陰刻を散らした紺表紙、題籤は二重の枠と、詠象詩と全く同様のこの書、恐らく前者も安田万助の刊行なのであろう。家蔵の『靈象貢珍記』は題籤の上半を欠くが、残っている下半は「來歴」と見えるので、「靈象來歴」とか「象之來歴」とかいう題籤であつたのだらう。文章は

それ象の字たるや六書の中にとりては象形とす、許慎のいわく……

に始まり、いろいろ象の話を書いた上で、ことし享保十三戊申の年六月十九日交趾国より太泥船に乗靈象を貢獻して……翌十四年己酉京紀に赴き四月二十六日伏見より洛に入り、同じき二十八日禁掖に朝し冒三天覽二十九日東武にむかふことに聖代の光りあまねく八荒に溢、異獸訳をかさねて来るの機兆と云と結んでいる。従つて、京で象を見て以後に刊行されたことは間違いないだろう。

これに対し江戸では、享保十四年五月、大学頭林信充の序、六月松会堂寿梓の『馴象編』が信充、信智（確

軒)、信篤(鳳岡)三人の詩を正篇に、信充以下二十六人の詩三十二篇を附編にして刊行された。信充らは許されて將軍に陪観した。

同書の刊記には「馴象俗談追付出之」と予告しているが、これは『馴象編』に

南海致奇獸 靈通且可馴 詭形当殿陛 臣體感星辰
承教堪為舞 聰言欲服人 號鳴牙信屈 拜詭鼻驕國
何必按圓籍 豈論非宝珍 聖朝恩澤遍 長此不焚身
の詩をのせた井上通熙の著である。

『馴象俗談』は享保十四年己酉夏六月穀旦、御書肆松会堂寿梓とあり、

爾雅に、南方の美なる者は梁山の象と聖人もの給へり、に始まって十四丁、色々の古典から象の記事を抜き、訳している。跋文がある。

馴象俗談跋

是歲広南致馴象我

国子祭酒林先生猷詩賀之且命通熙曰方今四海祇順

德意外邦來貢奇獸當是之時都邑閭里坐而觀之者雖感其跪貌巨体然或未信其聰言

承教也是故為之略叙其由一詠之以俗語則可通熙退而著此篇一旦述下所聞於先生者上如此

従つて、五月二十七日、江戸城に象が来て以後、至急に作つた物であるということになる。多少は事前に準備してあつただろうが、案外早く版行するものだと思う。

『象志』という書がある。見返しに享保第十四龍集己酉仲夏、雒、梅英軒、壽陽堂寿梓とあり、末尾に京、堀川通仏光寺下ル町、並川甚三郎、木村市郎兵衛、江戸、本石町三町目十軒店、植村藤三郎、大坂、心齋橋筋淡路町角、安井嘉兵衛とある。本文全十八丁、目録、引書目二丁、最初には馴象図があり、縦二七・二センチ、横一八・二センチ、片仮名まじり文である。本文の最初に、本朝享保十三年戊申六月七日ニ象牝二頭南京人持来ル同十九日ニ長崎十善寺唐人旅館ニ入ル、是レ南京人蛮国広南ニ渡リ此ノ象ヲ求来レリ

より始め、牡、牝両象のサイズ等を書き、あとに此、牝象去年長崎ニ於テ斃ナリ云々と述べているが、牡象が東上してくることは書いていないので、この原稿は三月中旬以前に成つたと考えてよいかも知れない。つづいて象形体 象交合并生子 象肉 象皮 象牙 象好酒 象

戦 天竺二僧感普賢乘白象など、象の通常の生態から歴史上の象、普賢菩薩と象など、象のすべてを紹介したものである。この著者は不明で、『国書総目録』なども所蔵者は多く掲げているが、著者名は欠いている。ただ家藏本の本文末に「京師本国寺塔頭智善院撰」とある。

『象志』の末葉に新刊書予告がでている。

象のみつき平かな多入
全部一冊

右追付板行出来仕候

『象のみつき』は三近子中村平五の著、全十九丁、享保十四年己酉五月吉旦の刊、書肆は『象志』に同じである。中に「奉天門馴象之図」、「交趾象山」、「住輦国大象」の三図が中村氏の自筆で画かれ、そして頭初に「此書兒女の理會しやすきめこと葉を、ひらたく書て、いさゝかも文をかざらぬなり」。

と出版趣旨を細字でしるしている。最も初めにしるすのはやはり前年に長崎に來た象の話である。

日本享保十三年、戊申の六月七日、異国より稚育の象を牽て、長崎十善寺に來り久しく寺中置、翌年己酉の五月、関東へ貢獻す。時に、とし七歳なり、此象広南に馴て、母象の乳味をいまだはなれず、日本江渡す事を聞て、象の母子甚だわかれをかなしみ、涙を流せ

り。其時広南人、日本ハ神国といひて、けつこうなる土地なりといひ合しかば、親子ともに、よろこびいさむ事かぎりなく、別れ臨て、ふたゝびかなしまず、船の乗り場まで、母象も送り來れりと、唐人長崎にて語れりと、此母象長生をたもち、長さ七間半に余れりといふ。象は靈獸、仁義の国にき□といふ事、誠なるかな。

この話ではいさゝかも文をかざらぬなりとは真赤ないつわりで、象の子別れ話と日本は神国という話を合せ、他書に見られぬ話に仕立ててある所が、まさしく兒女の理會の為なのであらう。

以上に紹介したように、享保十四年に多くの象に関する書物が出版されたのであるが、右の諸書はここ二十余年の間、目にふれた折々に購得した家藏本によつて書いたのであつて、まことに懶惰、訪書確認すべくして果さぬ資料が一・二存する。いずれも『国書総目録』で知つたものである。その一は岡山大学池田文庫に藏される享保十三年の、「象遣之広南人申趣並道具之絵」というものである。享保十三年に來航した象には、潭數、潭綿という二名の象遣いがついて居り、その通訳として漳州人の李陽明、広東人の陳阿印が居た。象が長崎に上るとた

だちに象の詳細を象遣いに尋ね、その説明の内容を書き上げ、象を遣う道具の絵を沿えて江戸へ報告をしたことは疑いなく、池田文庫のこの資料はその時のものの写し（或いは真本）であろう。道具とは、『通航一覽』一七五に引く享保年録に、象遣いが「二尺の鳶口を手縄として、象に打込自由に引廻し申候」とある鳶口、及び「象に乗ながら石火矢打放し可申道具持参候」とある物などである。説明の内容は、『通航一覽』刊本第四、五二五頁上段後半の「一象品々有」以下五二九頁下段末の、「右之通、象遣ひ候広南人申候、以上、申七月、長崎通詞、彭城藤次右衛門」とある部分がそのものであると想像する。彭城藤次右衛門は御用通事の筆頭人で、多くの重要な物を訳し、享保時代の通訳中の代表的な人物である。従って、尊経閣文庫の『象説』一冊は、著者が彭城藤次右衛門とあるからには、右の池田文庫の史料と同一のものと思像される。

象を賦した詩は先述の『詠象詩』に集められているが、和歌、狂歌、川柳など日本の詩歌も多くあったに違いない。『通航一覽』に引く『承寛雜録』は、靈元天皇の

ときしあれは他の国なるけたものを

けふこゝのへに見るぞうれしき

中御門上皇の

おのか名のきさらき弥生夏かけて

いくよろつ代の春を経ぬらむ

をあげ、「右に付、公家衆詠歌多く」と述べている。竹柏文庫に収める享保十四年とする『象の歌』という書を見れば、数多くの例を見ることができよう。

狂歌で管見に入っただけは、浪華の油煙斎貞柳の『家土産』及び『狂歌拾遺家土産』の二書に納められている数首で、絵がついている。『家土産』は享保十四年蘭月（七月）の萬笈斎桑魚の跋があり、同月の刊、撰者、大坂雛屋町、境屋四良兵衛、出版者は南渡辺町の桑名屋甚兵衛と、博労町心斎橋筋の菅田屋久兵衛である。絵は貞柳とおぼしき人が床の間に懸けた象の軸を眺めて居り、画像讀として（図3）

細い目をふりさけ見れはふる里の

象山とやらに出し月かも

とある。また、「象真行草の吟」として

享保十四年四月長崎より大象大坂に来る

真

おしあふハ象無頼なる見物となれもしるにや鼻てあし



図3 家土産の挿図

らふ

又や見ん交野をとふる大象のはなに水ちる夏の明ほの
行

めつらしとはなのあたりに立よるハ夏にさくらのふけ

んそうかな

優曇華とおもふ斗に大象のはな待ちえたることし嬉し

や

草

齒ぬきならで他の国より象ぶ覧ようく鼻でまんぢう

大象の来るハ目出度ことしか三ハ廿四孝みるこそ

とてもならまひとつ牝象ひきつれて江口の花をのら

せてしかな

の七首をあげる。『狂歌拾遺家土産』は天地二冊、宝曆

八戌寅年仲春刊、浪華の一本亭松濤美蓉の撰、画工、浪

華、北尾雪坑斎辰宣、彫工村上和助、書林は京寺町通五

条上ル額田正三郎以下、江戸、西村源六、大坂、西沢庄

八、荒木佐兵衛で、その地巻に

享保十四己酉年交趾国より江戸へ象一匹献上のよし

かねて風聞ありたれば

鼻の長さ十丈又ハ廿丈さういはふなら□しや見ぬき

四月廿日大坂へ着し京都へ行たるを枚方 梶村丹

治宅にて見物せしにわら一束を鼻にまきて水にひたし身にそゝきたるをみて

真行草三跡

又やミんかたのを通る大象のはなに水ちる夏の明ほの
大象のはな乃あたりはよきてゆけ子共つからにかけられやせん

大坂本町辺を通りたるに

大象もまんちうくひたい其時か本町辺を通りこそすれ

とみえ、象遣いを乗せ、二人の徒立ちの者を従えた象の図がある(図4)。竹山・履軒が生まれていたら本町辺でこれを見た筈である。

江戸といえは芝居、芝居といえは歌舞伎十八番で、象引がある。これは果して享保の象と関係があるかどうか気がかかる所であるが、服部幸雄氏の「象引考証」によると、この芝居が何時から演じられたかについては甚だ難しいものであるようだ。一般に、元禄十四年正月に中村屋で上演された傾城王昭君という狂言で、初代市川団十郎が山中平九郎と象を引合う場面が象引のはじまりという説があるのを、服部氏はその根拠はないとされ、また享保の象の渡来に刺戟されて、二代目団十郎が享保



図4 狂歌拾遺家土産の挿図

年間に演じたという説も、その根拠がない由である。狂言への反映は証拠がないが、享保十五年正月刊の役者評判記「役者美男尽」（江戸之巻）には「この人の芸と大象の鼻は、いく度見てもあかぬ」というような市川団十郎などの評文の中に大象の見立てが取り込まれている由である。

一方、人形浄瑠璃には服部氏も指摘されるように、享保十四年八月に大坂竹本座で「眉間尺象貢」が演じられた。作者は竹田出雲掾、長谷川千四、『近世邦楽年表』の享保十四年のところには

眉間尺象貢 周の桓帝の崩後その弟破輪王位を篡奪



図5 当世影絵姿鏡の象

し、太子を弑し、皇太后を犯さんとす。忠臣劉英、蘭良等之に対抗して肝膽を砕く。干将莫耶の子に眉間尺といへる勇士あり。その両親の鍛へたる宝剣の鋒先を含みて自刎し、首実検の場に於てこの鋒先を噴きかけて破輪を滅す。外題は今年四月交趾より象を貢ぎたるを当込みたるにて、作中にも象献上の条あり。と解説している。享保の象に刺戟されて何らかの形で象の姿が歌舞伎の舞台に見られたのではないかと思われるが、なお将来の研究成果を期待したい。

本節の最後に、趣向という点で二つの文献をあげておこう。その一つは影絵である。享保十五年正月に刊行された『当世影絵姿鏡』という書に象の影絵があり、「大象、ふとん、あしふる敷にてつゝミ」と解説があり、片手を出して鼻にしている（図5）。また、『作物趣向種』後編（天保八年序年刊）なる書に象と象奴があり、胴をすえ風呂、頭、足腰をゆかた、尾は手ぬぐい、爪と目はぬかぶくろ、足は小桶、鼻はかる石、牙をてつぼうで作ることにしてある。「お手際によい加減なる風呂道具、見る人ごとにおそれ入ます」という露居の狂歌を附す（図6）。江戸時代人の遊び心と象の人気をしめす例である。



図6 作物趣向種の象

四 象の絵について

前節で既に述べたように、『家土産』『狂歌拾遺家土産』には象の挿図があり、その他の象の文献にも挿図があった。

一般的に象の姿を画いた絵、挿図についていえば、仏教画の普賢菩薩像は普賢が象に乗っているところから必ず画かれ、さらに円山応挙の「江口君図」や月岡雪鼎の「見立普賢菩薩」図もある。

それに対して儒教の方でも必ず象が出てくるのは二十四孝図の舜の図である。舜が継母や父、弟にいじめられ独りで田を耕していた所、その孝心が天地を動かし、象が来て耕やし、鳥がくだって芸ったという話で、多く二匹の象が画かれている。二十四孝図は庶民教育に役立つものとされたから、多くの板本があり、象の姿も様々であるが(図7)、そのもとになったものの一つである元刊本『全相二十四孝選』が室町時代に写伝され、初刊本に最も近い様式を保つと推定される絵入本が、西本願寺の写字台文庫、現龍谷大学図書館に保存され、昭和二十一年に故禿氏祐祥教授の解題を附して全国書房から覆印されている(図8)。この覆印本では象は一匹で、通常

二十四孝図が二匹であるのと異なっているし、遙かにリアルで真象に近い。従って二十四孝図の象は次第に変化していったと思われる。

こうして、儒仏共に象にゆかりのある菩薩や聖人がいたから、一般庶民にしても全く想像もつかぬ存在ではなく、江戸の山王祭の糺街の唐人行列（実は朝鮮人行列）に大象の作り物が加わり、人びとの眼前をパレードした。天保九年の『東都歳時記』にはそのパレードの図があるが、「寛文上梓江戸名所記」によっているところから、享保の象の以前のものである。



図7 二十四孝図 舜の大象



図8 『全相二十四孝選』の舜の大象



図9 小田海儒の孝感動天図

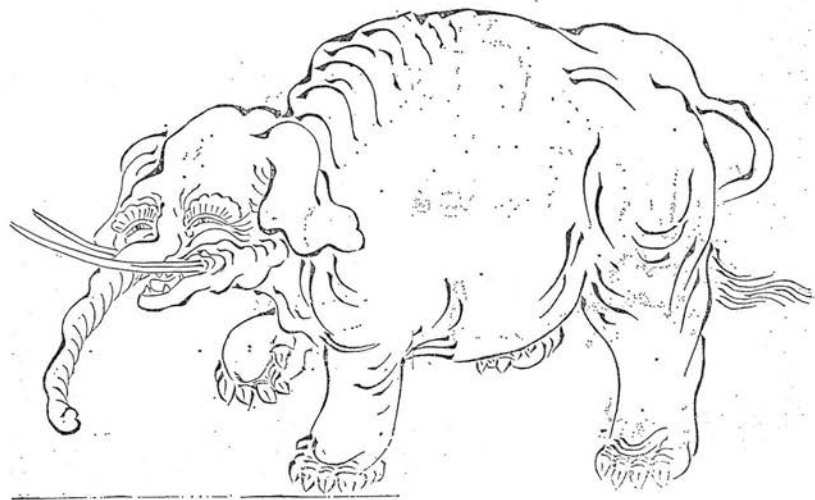


図10 画本通花の象

中井履軒作、象鈕の印より出発して

画譜の類の中では、『分類二十四孝図』（天保十四年刊）の「孝感動天」と題する小田海僊の図の舜の大象は（図9）、耳のあたりは従来の廿四孝の象の画法であるが、全体の姿は真象の趣きが見られる。それに対して『画本通花』（安永四年（一七七五）序刊、皇都、山城屋佐兵衛）の象は（図10）、身体の割に頭が小さいのは真象の図に近いが、目、口の表現は程遠いもので、必ずしも真象を見て画いたかどうか疑問に思える。

画譜の中で最も注目に値するのは、磯田湖龍斎の『混雑倭草画』下巻（安永十年（一七八一）刊、東都、竹川藤助、和泉屋幸次郎）の「象見物」と題する絵で（図11）、左頁に象の頭部前足を大きく書き、その足もとに驚口を持った象遣い、柵の手前に右頁にわたって男女、武士、町人、子供連れの見物客を配し、右頁の左端、絵の中央に柱を画いてそれに象が鼻を巻きつけている。極めて良く画けた図である。おそらく、浮世絵画家としての湖龍斎は、中野村の源助が見世物としていた時期に象を見て、その風景を写したのではないだろうか。そうするとこの図は、御用済になって以後の享保の象の姿を写した貴重なものということになるだろう。

それでは、享保の象を画いた絵があるだろうか。幸に

中井履軒作、象鈕の印より出発して

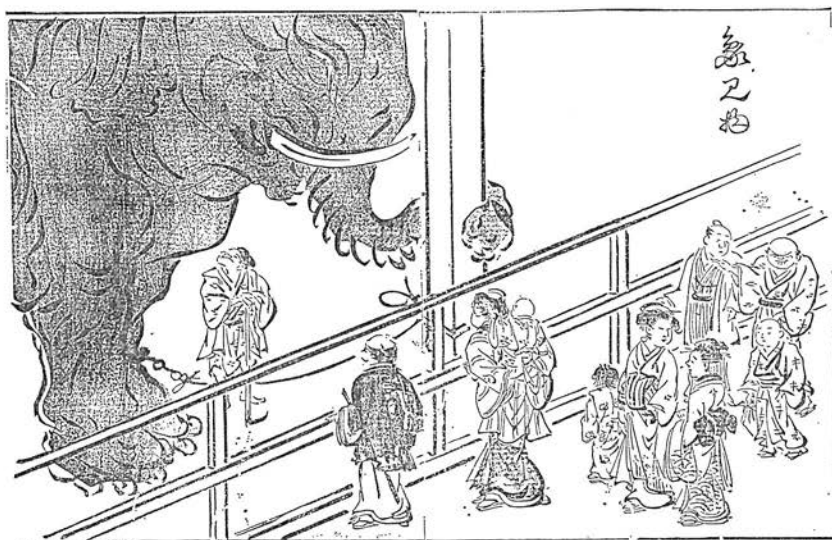


図11 磯田湖龍斎の象見物の図

して関西大学図書館では二点を保有している。

一点は掛軸仕立にした絵で（口絵図版二）、右を頭に
した象の絵があり、左下に「資則之印」陽刻角印、「有
堅」の鼎印、「晚翠」陰刻角印、の三印がある。⁽¹⁰⁾ 絵は稚
拙の感をまぬがれぬが念を入れて書き、鼻や口辺の毛も
画いている。一心に写した結果、かえってバランスを欠
く結果になった感がある。上部三分の二は画賛である
が、伊藤長胤、東涯の手になる。

享保戊申広南献馴象已酉四月廿六日入京詩以記之
大造育群品、洪纖各有区、靈椿虛伝寿、鯢鵬談亦迂、
惟象超獸倫、厥狀最魁梧、土性出南荒、万里風氣殊、
乃能燧爾尾、休道焚其軀、天薦種寔繁、騎畜如牛驢、
既比三獸渡、又說象盲摸、曩昔応永年、貢与鸚鵡俱、
伝聞不詳実、想像徒按図、方今丁昌運、醞化逼海隅、
異卉来絶域、文錦自勾呉、又見広南界、底貢遠栗桴、
潭数与潭綿、象養教象奴、葛蕉及占稻、餵飼代秣藿、
控勒無別具、一杖形如父、拝跪解人語、行止随指呼、
前年抵長崎、今夏駐洛都、轉困彎其鼻、擁腫楹其跗、
沿路人堵觀、填街又溢街、異物幸目擊、宏覓足破拘、
伊藤長胤書□□

右の五言詩は『詠象詩』の中に採られている。絵の筆

者はなお見出し得ないが、恐らく京都に当時居た、古義
堂塾に近い人であろう。

次は巻子本、「象之絵巻物」一軸である（口絵図版
三）。縦二七・五センチ、全長五〇九・五センチ、最初に
水を呑む白象を画き、⁽¹¹⁾ ついで一人が象にまたがり、二人
が従う図、次に三人が象の周囲にあって象が桶に鼻を入
れて水を呑む図、次は一人が騎乗、二人が従う後姿、次
は一人が騎乗し、一人が鼻にぶら下った姿、次は一人が
騎乗し、象が振り向いて二人を見ている姿、次は塙の外
で動かぬ象を一人が足に縄をつけて牽き、他の二人が手
かぎで前進させようとする姿、ここで侍姿の二人が先導
しようとしている。次は宮殿の陛前で象が足を折って坐
し、顔と鼻を挙げ、三名の内二名は象の側に居り、一人
が説明している。そのため陛上には右に二名、左に三名
の公卿が束帶姿で廊上に坐して象を見、陛の正面はみず
が下っているが、天皇（又は上皇）が御覧になっている
軀を示している。頭初と末尾に「探香」の陰刻印があ
り、筑前の画家尾形探香である。図柄はおとなしく丁寧
に描き、絵具も良質で、極めて美しい。

尾形探香は慶応四年（一八六八）に五十七才で死んだ
が、三十八才以降晩年まで探香を款しているというか

ら、本図巻は嘉永元年（一八四八）以降の作品ということになる。象に従う人物がすべて和人である点は享保の姿を実際に見たものでないことを物語るが、逆に彼は後述の文久の象を見て真象を知った可能性がある。

学習院大学、小林忠教授の教示によって細見実氏蔵、渡辺始興筆、白象図屏風を知った。頭を下げ、背を丸めた姿は、小林教授より指摘をうけた京都養源院の伝俵屋宗達の杉戸絵白象図（図12、小林忠著『江戸の画家たち』より）の翻案したものであることは明らかであるが、養源院の象が、目が大きく、牙が長く、耳が異常に

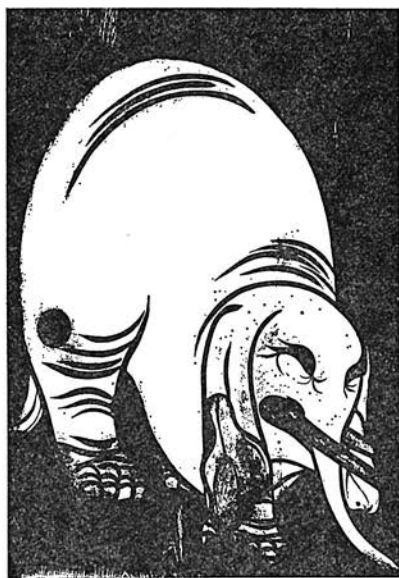


図12 養源院蔵 伝俵屋宗達の白象図杉戸絵

中井履軒作、象鈕の印より出発して

長く垂れ下っているのに対して、始興の象は耳も牙もまともで、頭部が身体の割に小さく、真象を見た為ではないかと疑わせる。

また『蘆雪名画選』には大橋理一郎氏蔵の六曲屏風、鹿苑寺蔵の「白象遊童図」六曲屏風が採録されている。始興にしても、芦雪にしても、応挙にしても、親しく真象を見、或いは真象を写した絵に接することができた人である。ところがその画く所の象は必ずしも、小田海僊、磯田湖龍斎や『象之絵巻物』などのような写実性には欠けているように思われる。これはいかに考えるべきであろうか。

五 試 論

私はここで、享保十一年十二月に、吉宗が象を牽渡るべく命じたのに答えた呉子明の請書を思い出すのである。それは『和漢寄文』にあり、『通航一覽』卷一七五にも引用している東京船主呉子明の請書である。最も重要な部分は、呉子明の中文ではなく、それを和訳した彭城藤次右衛門の日文の中にある。呉子明の「私御請申上牽渡可申候」という句の次に

白象は、常にこれなく候付、灰毛の象牽渡可申よしに

御座候

という聞き書が双行で挿入されているのがそれである。この語によれば、吉宗の注文は白象をひき渡れと命じたに違いない。白象と灰象と分けて考えてみると、普賢菩薩を乗せた象も、舜の田を耕した象も白象であること、磯田湖龍斎の「象見物」の象には黒い色がついていること、そして『象之絵巻物』は最初に白象を書き、それ以後はすべて灰象が画いてあることに気がつくのである。東涯賛の象も又灰色である。

つまり、普賢菩薩を乗せ、舜の田を耕す象は白象であり、神象で、牽き渡られた灰象、そして生きている真象とは違うのである。白象は何処かに神性を持っているだけならば、それは完全な写実的なものでは困るのである。そう思つて『象之絵巻物』の白象と灰象とを比較すると、色のほかに、目の上の眉が灰象には毛を書くが白象にはなくて波状になっており、鼻と牙は白象の方がやや長く書かれている。

渡辺始興は真象を見て知っているから、俵屋宗達の象のような目や牙や耳は画かなかった。しかし白象であるがゆえに、写実に徹することは許されなかったのではなか。五井蘭洲のいうように、「諸人あまねく真象を見

て、これ迄の象のよからぬをし」ったけれども、それでは神性を白象に如何に表わすかという別の問題が発生し、白と灰との画き分けが必要になったのだと思う。

最後に、文久の象の資料についてふれておこう。

まず翠栄堂露居の白象を相摸取が引く浮世絵がある。赤い引綱をつけ、なかなか美しい。次に関西大学図書館にある「南地大評判の大象、大都會ふし」とあつて笑福亭松橋作の戯文を書き、灰象が水を呑む図を配したちらし、太夫元、松坂の鳥屋熊吉の名で見世物への来場を誘う文と灰象が鼻で藁を束ねてふりあげている図を画いたちらし、この両者は象の姿が写実的でよくできている。次に家蔵のちらしで「天竺渡り生大象」とし、太夫元横浜の杉山吉造の名で口上を書き、白象に象遣いが二人つき、象の背では一人が樽廻しの曲芸を演じているちらしも文久の象の關係資料である。

神戸大学住田文庫には「天竺舶来大象之写真」（てりふり丁 えびすや）、「天竺舶来大象之図」（和伊勢庄）の浮世絵があり、共に西両国での興業の時の象の絵である。

しかし、最高の資料は懷徳堂に蔵する玉手棠洲の象図であろう（口絵図版四）。「慶應丙寅春、八九翁棠洲」

の落款があり、象は文久三年に横浜に来て翌々年大坂に
来たというから慶応元年に大坂に運ばれたわけで、慶応
丙寅春慶応二年（一八八六）、はまさしくその時期であ
る。右辺の落款に対し左辺に並河寒泉の

魁貌偉矣性寬而剛四蹄

君子其奈橫行 革翁

との賛がある。絵は灰象、比較的早いタッチで巧みに象
の特色を捉え、画き尽した感があって、まさしく八十九
歳の画筆と嘆じしめる。江戸時代の早期と晩期、白象と
灰象など、養源院の俵屋宗達の白象図杉戸絵とあい対比
できる作品ではないかと思う。

また肥田皀三教授の所蔵に菅其翠の画く象の図があ
る。「丙寅冬十月其翠写」とあるのは棠洲と同年の慶応
二年丙寅であること論をまたない。頭部、鼻などに毛を
画き若い象の姿がよく写生されている（口絵図版五）。

若し中井履軒の生卒年がもう少し遅れていて、この文
久の象を見ることがあったなら、彼の象鈕印は更に工夫
が加えられたことであろう。

註

（1）大庭 脩『江戸時代の日中秘話』第七章象の旅 一九

中井履軒作、象鈕の印より出発して

八〇年五月 東方書店刊

（2）市川真一『授業がいきる歴史四方山話』下 一九八四
年六月 あゆみ出版刊

なお谷崎潤一郎が明治四十三年に書いた「象」とい
う戯曲形式の作品はこの象が取り上げられている。

（3）高島春雄『動物渡来物語』 一九五五年四月 学風書
院刊

（4）この象のことは『耳蕕』巻一二に見える。

（5）「五井蘭洲の新題和歌百首」 長谷川雅樹 関西大学
第一中等学校『研修』一〇 一九六〇年三月刊

（6）山下幸子『享保の象行列』 『地域史研究』二一二
一九七二年一〇月刊

なお淀を通過した時の記録が京都博物館にある。

（7）服部幸雄 象引考証 小笠原恭子編『歌舞伎の世界』
所収 一九八八年三月 有精堂刊

（8）小林 忠『江戸の画家たち』 一九八二年一月 ベリ
かん社刊 一六〇頁

（9）註（8） 一七〇頁

（10）永井章子『渡来大象之図』 『籍苑』関西大学図書館
報二五 一九八七年九月

（11）近年、某書肆の目録中に象之図を見た。その説明で
は、堅五二×八〇糎、木版彩色刷画で、化政頃と年代
を推定している。晋郭景純（不明）の賛を書き、その
あとに「享保十三年戊申六月広南〇貫、其象己酉四月
廿六日入京師、因額其狀并賛刊布」とある。それで書

肆は、原画は其の際に刊布されたものと説明している。ところが、目録掲載の写真によると、その姿、構図はこの白象によく似ている。ただ色は灰色のようである。現物を見ていないので、確言はできないが、この白象を画いた構図はもとずく何かがあったのかもしれない。

(12)

京都国立博物館学芸課、狩野博幸氏の教示を得た。

本稿は未知の分野が多かったので、絵画に関しては小林忠教授、早川聞多教授に、江戸時代の芸能史関係については肥田皐三教授に教示を得、懷徳堂関係資料は岸田知子さん、関西大学図書館関係資料は永井（現長谷）章子さんの助力を得た。感謝したい。

追記 原稿提出後、関西大学図書館では更に新資料を購得した。それは享保十四己酉歳五月吉日、江戸三十間堀六町目象瀉屋清八板元の象のかしら版である。縦四六・五センチ、横三二センチの墨刷、黒い象に中国人風の象つかいが手かぎを

持つて乗っている図があり、象に関する一般的な説明、つづいて「象の年六歳長サ一丈高サ五尺余四足廻リ一尺五寸程鼻の長サ四尺程鼻の廻リ一尺五寸牙の長サ一尺二三寸但し上あごより出る眼三寸形ハ笹の葉のごとし」と実際に来た象の寸法を書き七言律詩を書いている。



(関西大学教授)